

# 協同の系譜

⑤

第1部

## 川崎 平右衛門

### 木曾三川の治水

# 痛み共有問題解決へ

川崎平右衛門は武蔵野新田開発を成功させた後、寛延2(1749)年7月に美濃国本巢郡本田陣屋に支配替えとなり、木曾三川の治水に当たった。

木曾三川とは濃尾平野を流れる、東から木曾川、長良川、揖斐川をいい、いずれも木曾川水系に含まれる。木曾三川は下流の川底が高く流れが滞留するとともに、西側ほど地形が低く、三川が複雑に合流・分流を繰り返していた。このため上流と下流、東と西で利害が一致せず、かつ小領に分かれ、統一的な治水対策が困難なことも加わり、洪水の常襲地帯であった。東海道五十三次が熱田から桑名までここだけ海路となるのも、陸路を続けると川、渡しが多くな

り、また氾濫によってしばしば通行が妨げられることによる。この地域では室町時代後期から戦国時代に輪中が形成されるようになる。江戸時代に入ると新田開発が活発化し、村落の形成とともに輪中の築造・修復も盛んに行われるようになった。輪中による大河川下流域の開発は農業生産の向上をもたらした。一方で川道が狭まって遊水池は減少し、下流の川床が土砂の堆積により上昇して、洪水の危険性を増し、新たな治水問題を引き起こすことにもなった。

#### 本格的な分流に着手

このため宝永2(1705)年には「近世治水工事中最大規模

農的デザイン研究所代表 葛谷 栄一



模」ともされる「宝永の大取払」により、やぶや立ち木、民家など流水の障害物の取り払いなどが行われた。しかし、効果は限定的であった。そこで抜本策として構想されたのが三川分流工事であり、三川の合流・分

流の排除を基本とした。巨額の財政支出を必然とし、とりあえず二本松藩による工事が行われたが、小規模で根本的な治水対策には程遠いものであった。これを受けて幕府は本格的な三川分流のための工事を行う腹固めをし、こうした中、治水巧者として登用された一人が川崎平右衛門であり、薩摩藩によるお手伝い普請であった。

平右衛門の普請を待ち受けていたのが、大樽川(おおくわ)食違堰(くいちがわいぜき)設置の案件であった。大樽川は長良川の水勢を緩和するために開削された川であったが、これによって揖斐川筋や大樽川流域はかえって洪水が増加することになった。このため大樽川流域の42カ村の農民は大樽川を締め切り、長良川からの水を断ち切る工事の実施を繰り返して陳情していた。こ

れに長良川側の13カ村が強硬に反対を続けてきたものである。

#### 堀上田農法など提案

そこで平右衛門は、締め切り堤ではなく、流れ落ちる水量を調整する洗堰(あらいぜき)の設置を提案。寛延3(1750)年10月には農民の負担によって実施する百姓自普請による食違堰設置を幕府に請願して認可を得、翌年1月に鉄くわ入れ、4月には完成させている。両者の調整を図るため平右衛門は、食違堰設置と並行して被害を受けそうな村への排水路の設置や、土を盛って水田にし、土をとって低くなったところを排水路とする堀上田(ほりあげた)農法を提案するとともに、益を受ける側からは米を出させて被害を受ける側の補償に充てるなどの手だてを講じた。

自村の立場を主張するだけでは問題は解決できない。互いに痛みを共有し乗り越えていくことを唱導した。(次回は11日付)